

沓冠折句の歌

① 脇冠折句の歌といへる | いつた  
ものあり。 | あるが

②十文字あることを、句の上下に置きてよめ  
名前 置い詠ん  
る だ もの  
なり。 である

④ 逢坂も 終わり 一日の  
果て は行き来の を取り締まる  
関も る いなくなる  
ず

訪ねて	来る
ば	ならば 来なさい
来	来
な	た
ば	ならば
帰さ	返しませんよ
じ	

この歌  
が 様々な女御、更衣たち  
差し上げなさつ  
たりた  
にが

まんじゅうのうた  
全員 は もらつた人  
心 理解ができ も 得  
す、返し どもを奉らせ ず、  
給ひなさつたりける たりける  
に た

その中に  
⑥ 広幡の御息所と申しける人の、御返しはなくて、  
申しあげたが返歌しないで

【丁·作者→讀者】

薰き物を奉らせたりければ、差し上げたので

歌の  
たしなみ  
が  
あること  
に  
ぞ  
と仁和の帝は  
お思いになつ  
おぼしめし  
たり  
けると、語り伝へ  
伝え  
ている  
たる。

⑦「をみなへし・花薄」といへることを、据ゑてよめる歌、

置い

詠んだ

⑧小野の萩  
見し秋に似ず成りぞ増す

以前に

たのようでなくたくさん増えている

萩を見ないで

時間が経つたことさえ失敗だつたなあ

経しだにあやな

萩はこんな

目立つた変化をしているんだから

しるしけしきは

あなたがこんなにも美しく変わつたのであれば、放つておかなかつたのに。

⑨これは、下の花薄をば、逆さまに読むべき

読まなければならぬのである

なり。

これも一つの姿  
なり。

読み方である